

# 沖縄歴史の vol.15

## 散歩道

### ◆墓を巡る①

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



仲原遺跡 (うるま市伊計島)

沖縄の墓といえば亀甲墓や破風墓をはじめとした独特な様式である点があげられます。本土のような石塔の墓は一般的ではなく、一族門中が入る大規模な墓であることが特徴で、その姿は家と間違われるほどです。かつては風葬という独特な葬り方もしていました。

沖縄では、このほかにも様々な墓の様式や葬り方が存在していました。貝塚時代やグスク時代には土葬も行われており、伊計島の仲原遺跡(うるま市)では廃棄された住居跡に死者を葬る「廃屋墓」も存在しています。グスク時代の集落遺跡でも住居のすぐそばに土葬墓を作るパターンが見られます。

各所にある石灰岩丘陵の崖のくぼみや洞穴に遺骨を葬る風葬墓もありましたが、さらに時代が下ると、こうした洞穴に木造の建物を建てて墓とする方法が登場します。宜野座村の漢那ウェーヌアタイ遺跡には洞穴の中に木製の家型墓が残っており、

伝承では「グッチャ按司」を葬ったとされています。家型墓は現在、宜野座村立博物館に移設されており、現地には同型の墓が復元されていますが、もとの墓の木材を調査したところ、なんと13、14世紀のものであることが判明しました。つまり確認されているなかで沖縄最古級の木造建物となります。



漢那ウェーヌアタイ遺跡の家型墓 (宜野座村)

同じような形式の墓に百按司墓(今帰仁村)もあります。運天集落を囲む丘陵中腹の崖下に家型墓を建て、その内部にはさらに木棺を安置しています。戦前には弘治13年(1500年)の銘をもつ木棺が確認されています。木棺には朱漆塗りが残っており、高い身分の者を葬ったことがうかがえます。現在、家型墓は崩壊し、さらに周囲は石灰岩の石積みで囲われているため、内部を見ることは難しいです。

この石積みは実は明治時代に築かれたものでした。沖縄県になり、当

### 上里 隆史

(うえざと・たかし)

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ポニーインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「ブラタモリ」案内人などメディアでも活躍。



時の県令(知事)の上杉茂憲がこの地を視察に訪れた際、百按司墓は老朽化し、壊れた木棺から多数の遺骨が野ざらしになっている状態でした。上杉は風葬を野蛮なものとして問題視し、県の予算を投じて「目隠し」の石積みを構築します。本土の視点から沖縄の風習を「改善」しようとしたのです。百按司墓は古琉球だけでなく、沖縄の「近代」を伝える遺跡であるといえるでしょう。



百按司墓 (ムムジャナバカ) (今帰仁村)